

## 【東京】術後リハビリに特化した体制で「安心の回復支援を実現」-森俊一・医療法人社団博豊会理事長に聞く◆Vol.2

専門スタッフ13人が在籍、生活再建直結のサポートを提供

2025年12月17日（水）配信 m3.com地域版

「高度な脊椎手術を提供し、その後の回復を最大化する」――。博豊会脊椎病院（東京都足立区）の森俊一院長は病院開設前から抱いていた課題感をこう語る。それから2年後の現在、同院にはリハビリスタッフ13人が在籍し、きめ細かなリハビリが実現できているという。病院は、成長スピードを重視したクリニックと経営の方法も異なる。110人の多職種を雇用する現在について聞いた。（2025年10月29日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら



森俊一氏（法人提供）

――博豊会脊椎病院には現在、理学療法士が11人、作業療法士が2人在籍しています。森先生は2023年の取材で、病院開設の理由に「リハビリ医療に注力したい」と思いを語っていましたが（詳細は『【東京】足立区に脊椎外科の専門病院を開院「リハビリ注力で入院中のサポートを厚くしたい」-森俊一・医療法人社団博豊会理事長らに聞く◆Vol.1』を参照）。

八王子脊椎外科クリニックでは非常勤の理学療法士1人の体制でしたが、病院では術後の運動器リハビリを支えるスタッフを増員し、患者さんが安心して回復できる環境を整えています。入院中に自宅環境をヒアリングして退院後の生活指導を行ったり、コルセットの着け方を指導したりと、手術後の生活再建に直結する支援を提供しています。必要に応じて術前から介入し、術後の継続的なリハビリを通じて回復を後押ししています。

スタッフは熱心に患者さんをサポートするだけでなく、学会参加や側弯症に対する特別な資格の取得に取り組んだりするなどして専門性を高めています。こうした取り組みは、「手術から回復まで一貫して支える病院」という当院の強みをさらに磨いています。

### 「いい人がいい人を呼ぶ」スタッフの姿勢に学生も感化

――「いかに良い多職種を雇用するか」を法人運営のポイントに挙げる開業医もいます。先生はどんなことを意識していますか。

「いい人がいい人を呼ぶ」というのが私の信条です。熱心なスタッフがいることで自然といい人材が集まり、病院全体の雰囲気や学生や若手を引きつけていると思います。当院は教育施設として理学療法士養成課程の学生を受け入れることもありますが、彼らはリハビリだけでなく手術から回復まで一貫したケアの流れを体感し、病院全体の姿勢に感化されていくようです。

スタッフのサポートを通じた患者さんへの貢献で言うと、将来的には思春期特発性側弯症への対応にも力を入れていきたいと考えています。これは早期発見と装具療法による進行抑制が可能な領域であり、患者さんやご家族への教育が重要とされています。成人脊柱変形と同様に、時代を見据えた医療を提供する国内有数の施設へと成長するためにも注力したいと考えています。

## 足立区医師会に「区内完結型」目指す機運

——以前の取材では、診療に注力する一方、地域連携を進めて「良いシナジー効果を生み出したい」と話していました。

周辺の先生方とは良好な関係を築けていると思います。患者さんの術前術後に全身管理などが必要な際は地域の循環器や呼吸器、麻酔科などの先生方に協力を仰いでいます。

足立区での病院開設も八王子市のクリニックと同様に地縁のない落下傘でしたが、連携がスムーズに進んだのは地域の特性も関係していると思います。というのも、足立区には大病院がなく、中小規模の病院が多いんです。足立区医師会に入会する際に医師会の会議に参加した時、当時の医師会長が地域の特徴について言及していました。「足立区の人の中には、何かあると千代田区や文京区などの大病院に行く人が少なくない。なんとか、足立区内で医療が完結する仕組みをつくりたい」と思いを語られていたので、足立区医師会には「区内の先生方と良好な関係を築いていこう」という機運が醸成されている印象を受けます。

——同じく以前の取材で、「クリニックでは成長スピードを意識してきたが、多くの人が働く病院ではボトムアップ経営を目指したい」と話していました。

その考えは変わっておらず、昔のように「自分についてこい」というのは成り立たないだろうと思います。八王子脊椎外科クリニックのように19床の規模感だと「皆で頑張っけて乗り切ろう」でいろいろなことができますが、病院では規模的にも時代的にもそれではいけない。多くのスタッフに協力してもらうには、スタッフが進んで「協力したい」と思える職場にしないといけません。そのためには、トップがぶれずに病院の理念を伝え続けること、「患者さんのために」という思いを丁寧に発信し続けることが大切だと思います。

その意味では、今、良いリズムができつつあります。主体的に考えて行動できる人を各部門のリーダーに据え、その人を中心に協力し合いながら運営できている手応えを感じています。病院はクリニックより規模が大きいので、何をするにしても一つ桁が違う。インパクトの大きさが経営者としてはやりがいがありますね。

——先生は2年前から一貫して「国内有数の専門施設にしたい」と目標を話しています。現在、山頂の何合目まで来ていますか。

5合目を越えて、6合目に向かうところでしょうか。手術件数だけで言えば全国でも上位に位置付けられますが、大事なのはあくまでも「質と結果」なので、これらを追求していくことが大切です。究極的な理想としては、当院で治療を受けた患者さん全員が納得して帰れるようにすること。そして、スタッフが誇りを持って働ける職場にすること。つまり、「患者満足度とスタッフの働きやすさが両立する病院」を目指しており、逆にここを目指さなければ、長期的には続いていかないでしょう。

そして、当院の一番の強みである手術については、他の医師が嫌がるような、面倒だと思うような難症例にきちんと向き合う特長を今後も伸ばしていきたいです。これらを胸に地道にやっていけば、さらに私たちの理想像に近づけると 생각합니다。

1993年愛媛大学医学部卒。帝京大学医学部附属溝口病院や鎌ヶ谷総合病院脳神経外科脊椎センターセンター長などを経て、2013年に八王子脊椎外科クリニックを開院。現在は2023年に開設した博豊会脊椎病院の院長を務める。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

